

---

# 遊戯王GX どうしてこうなった.....

にーと

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

遊戲王GX どうしてこうなった……

### 【著者名】

にーと

N67350

### 【あらすじ】

友達居なくてタッグフォース（TF）やり込んでた俺がGXの世界に！？ ほぼすべてのカードを網羅した俺に敵はない？ すみませんちょっと調子に乗りすぎました。許してください出来心だつたんです。

## プロローグ（前書き）

性懲りもなく投稿。

更新速度はかなり遅い出すよ？

## プロローグ

俺の名前は山田和希やまだかずき、田舎町に住んでる中学生だ。

身長は165?で体型はやややせ気味、自分で言つのも何だがそれなりにイケメンの部類にはいると思つ。ただ、少しオタクが入ってるせいでモテたことはないが。つーか田舎にはオタクが少ないんだよ、おかげで友達すら(´・ω・)」

趣味は遊戯王、趣味つてレベルじゃないくらい嵌り込んでる。しかし。田舎過ぎてカードショップなんて物はない。それどころか遊戯王を扱ってる店は家から自転車で最低一時間はかかるし、品揃えも良いとは言えない(俺は通販使ってるけど)。そんな環境じゃ周りで遊戯王やってる奴なんて居ないし、誘つても敬遠される。

だから俺は、やる気のない弟にデッキを貸してデュエルするが、遊戯王オンラインぐらいでしか他人とデュエルすることが出来ない。オンラインは新カードの実装が遅いから最近はもっぱらTF5をやつてるんだが、最近はC.P.Uのバターンをおぼえてしまつて得意なデッキを使うのがつまらなくなつてきたところだ。仕方がないからネタデッキの構築に一日の大半を費やしている。

今日も遅くまでデッキの構想を練つてから、遊戯王ブログの更新をして寝た。……はずだったのに。

「どうしてこうなつた……」

(あ……あつまま 今 起こつた事を話すぜー・

『朝起きてコースを見ると某社長が  
高笑いしながら新しいテーマパークの見所を語っていた』

な……何を言つてゐるのか わからねーと思つが  
おれも何をされたのかわからなかつた

頭がどうにかなりそうだつた……

「スプレだとソックリさんだとか  
そんなチャチなもんじやあ 断じてねえ

もつと恐ろしいものの片鱗を味わつたぜ……）

（……まあ、ネタは此処までにして。…ホントに夢じやないのか。  
ほんとに？ 頬をつねつてみる。痛い、当たり前か夢じやないんだ  
から。夢じやない……ほんとに？ 頬を……）（以下無限ループ

（やうだー、テツキはー。）

急いで部屋に戻る、カーデに埋め尽くされていた押入はスッカラ  
カンになつていて代わりに見覚えのない鞄が一つと高級そうな木箱  
が置いてあつた。

鞄を開けるとそこには……

（さつき見たのは忘れよ。さつき見たのつて何だつけ？ まあ忘  
れるぐらゐの小さな事だな、うん。……でも、もうこの鞄はのぞき  
込まない方がいいな）

中に何かが入つてゐるかのよつにふくらんでいるこの鞄に手を突  
つ込んでみると手が底に当たらず肩まで飲み込まれてしまつた。

（あ～）（ソラ）の、どつかの本とかあるよな～）

次は中にカードが入ってるイメージで手を入れると確かに触れる感覚がある。それを掴んで取り出してみる。

（ブルーアイズホワイトスラブン）

（青眼の白龍。想像したカードが出てくるのか、ちょっとこつもと違うな？ カードの素材が……何だ？ 手触りは紙だが曲げても戻るし堅い。それになんだか威圧感が……って青眼の白龍は世界に四枚しかないはずじゃん。持つてたらまずくね？）

カードを鞄に投げ入れると、隣に置いてあつた木箱を取る。開けてみるとそこには金色の決闘盤が……。

（派手、すぎるわーーー！ つてこのフォルムはTF？ まさかこの鞄も！）

もう一度手を突つ込むと今度は迷わず取り出す、今度は束だ。

（俺のデッキだ間違いない。しかもこれはTFのカードがそろつている。しかもOCG化していないカードや原作効果、アニメ効果のカードもある、ん？ コレはスターダスト？ 何で融合モンスターに……。いや、どこかの二次創作であつたな）（ソラ）の、まあバランス調整か。シンクロバージョンもあるけどコレはコレで面白そうだな、後で使ってみるか）

さりに鞄をあさりながら決闘盤がTF3までのだつたらな～なんて考えてると堅い物が手に触れた。まさかと思つて取り出してみると……

「出たよ…… オシリス・レッド、もしかして……」

他にもあるのかと思つてあわててみるとスタロ欲しさに買ったホビーフィギュアの決闘盤が出てきた。いつかもちやんとシリコンドライビジョンがいる。と、いつひじで遊星バーレの決闘盤を残して他の「トイスク」は直すとデッキの編集を始めぬ。

（いつちの禁止制限ルールはどうなつてるんだ？ 調べないとなつか、今はどの時代なんだ？ ま、それは後日調べていくか……）

（……今更夢だつたーなんて言われたら自殺するかもな俺）

ちよつと浮かれすぎていたのかも知れない。本当に夢のよつな体験に馬鹿なことを考えてしまつぐらいいには。

## プロローグ（後書き）

シンクロモンスの扱いについては阿音ちゃんの所みみたいに扱います。  
ちなみにトートなどの遊戯王関連商品は無くなっていました。

## 第一話 俺とカードと実技試験（前書き）

やつとトコエルです。ネタ“テッキ”って面白いですよね、よく使つてます。でも、相手がガチなら“つちもガチ”“テッキ”です、遊んでなんか居られません。

……まあ作者はかなり遊戯王弱いんでどうかにしても負けますが。

## 第一話 僕とカードと実技試験

「デュエルアカデミア実技試験当日。朝からデッキやデュエルディスクの確認をし、帽子を日深に被つてホテルを出る、ちなみに帽子は海馬コーポレーションのロゴ入りブラックだ。寝坊しても問題ないようにならんと試験会場の近くを借りて泊まっていたので、時間にはまだ余裕がある。

……実はこの一年半でデュエルモンスターを止めようかと何度も思った。なぜかつて言つと、この世界のデュエリスト達のレベルが低すぎるからだ。

相手にならない、つまらない。これならあっちで遊戯王オンラインやってた方がずっと楽しい。しかし、戻る方法も解らないし、そもそも戻れるのかすら不明である。

一応、いっちゃんのデュエリストが弱いことも理由がある。

まず、レアカードの価値が高い。元の世界では普通だった打ち出の小槌ですら四桁になるつていうのはあんまりだと思う。他にも、マシコマロン五桁、光の護封剣六桁、サイバードラゴン七桁など。馬鹿げた数字になつていていたりする。

こつちでは基本的に絶版になつたカードはもう出でこないし、初期のカードは大抵高く売れる。強欲な壺や天使の施しなんかのカードはまだ絶版になつてないが、それでも四桁を維持し続けている。

そして、デッキの構築が悪い。良いカードが高いのは解るが、こっちではありとあらゆる場合を想定してそれに対するカードを詰め込むのが定説になつてゐる。たとえば相手の強欲な壺を無効にし一枚ドローする、『壺盗み』、確かに使えたら良いだろうが、出来なかつたら入つてるのが無駄なだけである。

他にも、発動するのが相手に依存している微妙なカードだつたり。これは三枚積まないと駄目だろうつて言つカードが一枚だつたりするからお手上げだ。

最後に『運』だ。こっちの世界では勝敗の半分以上は運で決まると言つても過言ではない。正直運さえあれば必須カードが一枚でも十分だつたりするぐらいだ。

この運も、人によつてばらつきがある。やつぱりスゴい奴は手札一枚から逆転とかするし、キーカードが初手に来たりもするが、弱い奴はここぞ！ つて時に使えないカードを引いたりする。

……まあ、俺もこつちに来てからチート体质になつたみたいで、ガチデッキなら後攻ワンキルとか普通に出来てしまつようになつてるんだけど。

ついでに、カードを信じる心！ とか言つたりもするけど、デッキはシャッフルしない限り、順番が変わつたりしないんだから最後まで諦めないでやればいいと思つんだが。

そんなこんなで生きる意味を無くした俺だが、結局俺はデュエルモンスターZを止めなかつた。今更止めるには俺は遊戯王には近すぎたし、止めると何をすればいいか解らなくなるからだ。

しかしこの世界では外を出歩けば、微妙なデュエルが目に入る。いろいろする、だから特別な事情がない限り俺は家を出歩かずに今

までデッキを弄っていた。

そんなある日、部屋でブログの更新をしていると一通のメールが入った。

今までずっと負け続けてきたけど、このサイトを見てからデッキの安定性を求め続けて、やっと勝つことが出来ました。本当にありがとうございます。

終わりのない絶望に光が差した気がした。そう、相手が弱いなら強くすればいいのである。そこで、育てる人物に会うためのデュエルアカデミアだ。そこなら引き運が強い奴が集まるだろうし、既にGXの主人公組と歳が一緒なのは確認済みだ。

そこにいて、十代達のデッキを魔改造するのだ。もちろん、素直に弄させてくれるとは思わないから、徐々に思考を誘導していくんだが……。

さて、会場に着いたみたいだ、どうやって暇をつぶそうかな。ん？ アレは空氣男<sup>二郎</sup>じゃないか。まあ、取りあえず放置かな、ってよく見ればスタンドの方に万丈目や明日香、カイザーもいるな。うん、だんだん楽しみになってきた。早く始まんないかな、ちゃんと試験用のネタデッキを作ってきたんだし。

『これよりデュエルアカデミア実技試験を行います。一番から九番の人は各ステージへ上がつてください』

お、始まるか。俺はもちろん一番だ、人生の殆どを遊戯王に費や

してきたんだからな。デュエルディスクを腕にはめ、ステージへ上がる。既に試験官は準備をして立っていて、ビシッ！ と指をして言い放ってきた。

「君が全問正解って言つ筆記試験一番か。本当は試験官用のデッキを使わないと行けないんだけど……。どれだけやるのか見てみたい。悪いけど、本氣でいかせて貰うよ。」

「…………」（……まづい、声が出ない）

それはどうなんだんだよ！ とか言つてやりたくなつた物の。この半月くらい、人と話していないことを思い出す。どうやらしゃべり方を忘れてしまつたみたいだ。それを試験官は不安に思つたと取つたらしく。口調を緩めてこう続けた。

「ああ、だいじょうぶ。もしデュエルに負けても実技を合格にするかは僕の判断だからね。良いデュエルが出来たらバッチシだよ」

別に強い相手とデュエルするのはOK何ですけどねー。とか言つてやりたかったけど声が出ない。仕方がないから諦めることにした。決闘盤を構える、同じく決闘盤を構えた試験管と皿が合つた。

「「<sup>デュエル</sup>決闘！」」

お互ひの決闘盤が展開され、デュエルの準備が出来る。ちなみに俺のディスクにはシャッフル機能が付いている。逆に言えばシャッ

フル機能は俺のにしか付いていない。

「先攻は譲ろう。全力で当たつてこい！」

「……ドロー。グリズリー・マザーを守備表示で召還。カードを一枚セットしてターンエンドだ」

「守つてばかりでは勝てないぞ！ 私のターン、ドロー。手札から切り込み隊長を召還。モンスター効果によりさらに手札からレベル四以下のモンスターを特殊召還する。いでよ、コマンドナイト！」

試験官のフイールドに金髪のおっさん兵士と赤い鎧の女戦士が現れる。なかなか良いカードだな、戦士族デッキには使えるから」つちの世界ではどのぐらいで買えるんだろう?

「コマンドナイトの効果で場の戦士族モンスターは攻撃力が400ポイントアップする。さらに手札から神剣フェニックスブレードと融合武器ムラサメブレードを切り込み隊長に装備させる。これで切り込み隊長の攻撃力は2700だ！しかも切り込み隊長を倒さないと他の戦士族にはアタックできないぞ」

切り込み隊長の両手に一本ずつ剣が現れる。融合武器「サメブレード」はかつて「デザイン」だが融合してしまったせどりかと思つぞ。あの「テッキ」は装備戦士かな？ なかなか面白「テッキ」だけがチではないな、まあそこそこ楽しめそうだ。

「バトル！！」コマンドナイトでグリズリー・マザーを攻撃、コマンドスラッシュショー。」

グリズリーマザーがコマンドナイトに切り裂かれる。横から見て

ると「マンドナイトを応援したくなるな。

「…グリズリー・マザーの効果発動。デッキから攻撃力1500以下の水属性モンスターを攻撃表示で特殊召還する。こい、グリズリー・マザー！」

「ふつ、固めてきたか。だが次は攻撃表示、ダメージを受けて貰うぞ。切り込み隊長でグリズリー・マザーを攻撃」

「コイツは伏せカードを警戒することを知らないんだろうか……、思つたほど強くないのかも知れない。

そして一体目のグリズリー・マザーも切り捨てられる。しかし今度は応援したくなつたりしないな……。

「なに！ ライフが減つていないだと！」

「トラップカード、ガードブロックを発動した。これにより戦闘ダメージはゼロになり、俺はカードを一枚ドローする。さらにグリズリーマザーの効果発動。デッキからカタパルトタートルを特殊召還

俺のフィールド上に背中に砲台を付けた亀が現れる、やつとこのデッキの見せ場だ。思う存分に暴れさせて貰おう。

「まあいい、私はこれでターンエンドだ」

案の定トラップは無し、この手札なら何とかなるかな。

「ドロー、手札からマンジュゴッドを召還。デッキから儀式魔法を手札に加える。俺は亀の誓いを手札に加える。そして強欲な壺を発動。デッキからカードを一枚ドローする。

よしつ、そして亀の誓いを発動！ フィールド、手札からレベルの合計がハ以上になるように墓地に送らなければならないが、俺は手札のシャドウ・リチュアを墓地に送る。シャドウ・リチュアは水属性の儀式召還のためのリリースをこのカード一枚で行つことが出来るカードだ。現れる！ クラブ・タートル

フィールドに縁の亀と融合した赤い蟹が現れる。首の所は亀の頭があるべき所に蟹の目が一つ、ぎょろつとくついている。……ぶつちやけキモイ。

「最上級モンスターを出してきたか、だがそれでも、そのモンスターの攻撃力は2550。私の切り込み隊長には敵わないぞ」

「大丈夫だ問題な（r y ……手札のアトランティスの戦士の効果発動！ デッキから伝説の都 アトランティスを手札に加える。そして、伝説の都 アトランティスを発動。水属性モンスターの攻撃力を200ポイントアップさせる。これでクラブ・タートルの攻撃力は2750切り込み隊長を上回つた。クラブ・タートルで攻撃！」

「ぐうううう。しかし、まだ50ポイント。勝負はこれからだぞ」

「残念、メインフェイズ2でカタパルトタートルの効果フィールド上のモンスターを生け贅に捧げその攻撃力の半分のダメージを相手に与える。クラブ・タートルとマンジュゴッドを射出！」

ライフ 3950 1875

マンジュゴッドとクラブ・タートルが光の玉になつて試験官に飛

んでいく。一発同時になつてるんだが、効果の処理はどうなつてるんだ？

「つぐ、しかしクラブ・タートルを残さなくてよかつたのかい。まだ私のライフは半分近く残つているよ」

「残念つて言つたる。永続トラップ、血の代償。ライフを500ポイント払うことでもう一度召還をすることが出来るカードだ。1000ライフ払い、手札からゴラ・タートルと幻影のゴラ亀を通常召還。そしてゴラ・タートル、幻影のゴラ亀をリリース！」

ライフ 1875 525

可愛い系のデフォルメされた亀とそれの半透明になつたバージョンの亀が現れ、光の玉となつて飛んでいく。試験官の驚く顔が目に入つた。

「これで最後だ。カタパルトタートル！」

ライフ 525 0

カタパルトタートルが光に包まれ、試験官に向かつて（「や光にぶつかつた試験官は自ら後ろに飛んだ、んだよな？ リアクションがリアルすぎてほんとにソリッドヴィジョンか解らなくなるな。

何はともあれ俺の勝ちだ。背中を打つて痛がつていい試験官に一礼してさつさとステージを降りる。さて、スタンドにあがつてめぼしい生徒をチェックするかな……お、あの娘はなかなかだな。……

~~~~~

「君はもしかして山田和希じゃないか」

良いのが居ないなーと呆れた田で見ていたら声を掛けられた。声からしてあんまり良い予感がしないなーと思つて振り向くと、案の定、エアーマンこと三沢大地だった。……白か黄色じゃないのは新鮮だな。

「ちがう、だいたいデュエルキングがこんな所に居るわけないだろ。」

「俺は別に山田和希がデュエルキングだとは言つてないぞ」

ちつ、面倒だな。どうやって誤魔化すか……

「なんだ四代田デュエルキングと同姓同名の奴が知り合いに居るのか、残念だが俺はその山田和希じゃないぞ、そんなに似てるのか」

「いや、山田和希なんて知り合いは居ない。が、君はデュエルキングの山田和希に似ているな」

「ああ、よく言われるが、帽子を被つてているだらう。他人のそら似じゃないか」

「眼鏡だよ、フレームの形が一緒だ、あとこの形も似ているしな」

「……実は同じ型を使つてるんだ」

「苦しくなつてきたぞ。それに、横のステージから見ていたがあの

ディスクは和希のにしか使われていないシャツフル機能が付いていたし、プレイングも見事だつた

「ちょっと待て、あの『テュエル』を見ていたなら解るだろ、キングはあんな亀『デッキ』使わないつて。ディスクだつて新しく作ったものかもしれないし」

「いや、俺は知つてゐる。四代目キングの山田和希は気分によつてデッキを換えることも。ネットで『遊戯王』デッキ作りの第一歩』と言つサイトを作つてゐることも。一番得意なデッキが「ちょっと待てーい！」どうしたんだ？」

「何で俺があのサイトをやつてることをお前が知つてゐるー。」

「やつと認めたか。それは、あのサイトで使われてゐるカードの中にチューナーモンスターがあつた。チューナーモンスターは四代目キングしか持つていらない新しいカード。そのカードを使つたデッキがあると言つことはあのサイトを作つたのはキングしかあり得ないのさ。しかしこれで納得がいった、俺が一番でないのはキングが居たからか。俺はまだまだ君には勝てない、それはあのサイトを見ても明らかだ。しかし、君の理論を取り入れ自分の物としてその上で君を倒す！君もアカデミアにはいるというならちょうど良い。3年で君を越える！そして自分だけのデッキ理論を見つけるんだ！そのためにはつそく帰つて研究だ。と言いたいが、一応他の人の試験も見ていくことにするよ」

「お、おおつ……。」

といきなりのライバル宣言に軽く引きながらも、三沢の隣に立つ。そなたが居たのかー、とかサイトのことを考えて

「ちょっと話を聞いてたんだけど、本物なの？」

「おおう、明日香さんじゃねーですかい。隣にカイザーもいるけどまあ良いか。

「本物つちや本物だけ、そぐで無ことも言えるな」

明日香が眉をひそめる。

「どういふ事」

「大会では優勝したけどキングになつたつもりはないって事」

実際、納得いってないしね。実際、地元に三代目キングがやつて来たのをフルボッコにして次の大会の出場権をもぎ取つて、大会で優勝しただけだし。遊戯もキング止めてどうかふらついてるんだろう？

「ちょっと良いか」

「ん、今度はカイザーか。

「どうした？」

「いや、それだけの実力があるならどうしてプロにならなかつたんだ。スポンサーも沢山出来ただろう」

「正直に言つと、強い奴が居なかつたから。本気が出せなくてストレスが溜まる。相手の実力に会わせたテッキを使っても良いんだが。

たまには全力でやり合える相手が欲しい。で、ここに来たわけだ

「……此処には強い決闘者が居ると」

「いや、居ない。せいぜい中の上だ。そこで俺が強くする。『デッキの構築法を教える、必要があるならカードをやる、ブレイングが悪いなら直させる。それで俺と同レベルのデュエリストまで引き上げる。そこから始めるんだ、俺のデュエルを」

「「「…………」「」」

誰も、一言もしゃべらない。俺は会場に目を戻して続けた。

「傲慢だつて言うのは解ってるし、弱い奴からすれば俺はかなりムカつく奴なんだろう。けど！ 戦わずには居られない限界で、ぎりぎりの勝負を」

再び沈黙が続く。三沢が力強く俺の背中に声を掛けた。

「……俺は、俺は、そこまで上り詰めてやる。お前が居る、プロですら弱いと言える高見まで！」

「そつか…。それじゃ期待してるぜ、大地！」

不意に、涙がこぼれそうになつた。やばいな、かつこいいぜお前。

「また、また。受験番号110番結城十代。まだ、試験は終わっていないよな。」

入り口から飛び込んできた一人の少年。……まあ十代なんだけど。

を見るとあほらしくて涙が引っ込んでしまった。取りあえず後ろに立つたままの大地に十代を指しながら言つ。

「取りあえず大地、お前はアレに勝つてから俺と戦え」

「なんだ？ 強いのか」

「取りあえず、あの変な先生に勝つ程度にはな。問題は引きの強さだ、俺でも勝てるか解らんな」

「そりか面白い、やつてやるぞー！」

「ちょっと、変な先生つてクロノス教諭じやない。かなりの実力者よ、つて言つたか彼は知り合いなの？」

「いや、こつちが一方的に知つてただけだ。今は遊戯にも目を付けてるな」

「遊戯つて、あの遊戯さん！ キングオブデュエリストじやない、どうしたつてそんな人に……」

「さあな、カードに気に入られたとか、俺には精靈なんて見えないからよく判らんけど」

カードつて……。と、なんか困惑氣味の明日香を横田にデュエルは進む。うん、原作道理のシナリオだな、ちょっと安心した。

さて、これで見るべき物は見たな。帰るか、発表日までゆっくりしどいつ。あ、サイトの編集しないとな。

## 第一話 俺とカードと実技試験（後書き）

執筆途中の愚痴コーナー

デュエルティスクつて打つのめんどい。けど決闘盤は厳しい、どうしようかなー

ほんとはアトランティス戦士の効果を使ってから壺の方がよかつたんですがね。それだと見せるデュエルにならない。

手札の枚数会つてるよね？ すっげー不安。

ちなみに主人公の容姿はTFの奴に四角いフレームの眼鏡をかけてます、そんだけ。

感想、お気に入り登録は作者の生きる活力になります。良ければ何か書いていってください。

## 第一話 俺と十代と三沢大地（前書き）

万丈目のキャラが解らないわー、とか三沢を大地って打つの違和感あるわー、とか翔はこんなにっす、つす言ってたかなーとか考えながら、まあコレでいいか。って感じで投稿。

## 第一話 僕と十代と三沢大地

「人食い虫」

「「し」か。シルバー・フォング」

「グリズリー・マザー」

「ざ、…ザ・キックマン」

今、俺たちデュエルアカデミア高等部新入生はアカデミアへ向かうフェリーに乗っていた。甲板で手摺りに寄り掛かって、大地とだべっているとオベリスクブルーの三人組がやってきた。って、よく見たら万丈目か何の用だろうな、だいたい予想は付くが。五メートルほどの位置に来ると、取り巻きその一が言った。

「おい、お前、あの山田和希らしいな

「だつたら?」

いかにも不機嫌そうに顔をしかめて言ってやる。すると取り巻きその一が上から田線で言う。

「いや、お前が頼み込むつて言つなら。俺たちの仲間に入れてやるよ

「じるか、どうでも良いからあつち行け」

「なつ！」

まさか断られるとは思つてなかつたのか、口を開けて驚いている。俺としてはどうしてそんなに自信があるんだって感じなんだが。

「万丈目さんは、あの万丈目グループの息子なんだぞー。」

「だから?」

「だから? って……」

「言つたら正直どつでも良い。いや、やつぱジャマだ、どつか行け」

「こいつー」「まひつー！」

取り巻きその一が掴みかかつて来ようとする、それを今まで喋つてなかつた万丈目が止めた。しばらく俺と万丈目の睨み合いが続く。

「ふんつ、気に食わん奴だ。いくぞつー！」

そう言つて万丈目と取り巻き達は船内に帰つていった。

「何だつたんだあいつら」

「別に、ただの勧誘だろ。ビーでもいいつーの」

万丈目達が出ていつたドアをしばらく眺めていたが、視線を海に戻そうとした時、またドアが開いた。出でくるのは……

「なんだ、十代か、翔もいるな

「なにつ、十代だとー！」

「あ、おー。ちょっと待て……」

十代という言葉に大地が異常に反応して、静止の声も聞かず、ダッシュで“やっぱ、外の空気はつめ～”とか言つてる十代達の方に走つていつた。

「やれやれ

俺も手摺りから背中を離して大地の後を追う。

「……だが結城十代！ 俺はまだお前を研究し終えていない。しかし、すぐに作つてやるぞお前専用の対ヒーローデッキをな！…」

「アホかお前はつ！」

大地に近づき頭をはたく、予想以上にいい音がした。大地はなんだか恨みの籠もつた目で俺を見ていたが無視。視線を驚いてる十代の方に向けて話す。

「悪いな、この馬鹿が迷惑かけた」

返事は聞かずに大地の腕を掴んで手摺りの方へ戻る。そして言つたいことは山ほどあるが……

「アホか。まず最初に、初対面の奴にいきなり名指しでライバル発言されたら驚くだろうが。そのくらい考えろ馬鹿」

「んっ？ それは悪かった。しかし…」

「黙れ。…一つ目、何が「対ヒーローデッキ」だ。そんなことばつ

かりやつてるからお前は一番になれないんだ。アンチデッキで勝つて何がうれしい。本気でアンチを組むなら勝つて当たり前だ。デュエリストって言つのは自分のデッキを突き止めて、その上で苦手なカードの対策をするんだよ。お前みたいに相手によつて勝てるデッキに換えてるよ!じや、一生一番には慣れないぞ」

「……それは、和希だつて人によつてデッキを換える時があるじゃないか」

「は～つ、アホか。アレは手加減用に作ったお遊びデッキだ。俺のデッキはここに連中には強すぎるんだよ。だいたいお前みたいに戦する相手を考えてくんだ訳じや無い。だいたいお前が作ったアンチデッキは特定の相手には刺さるだろ?がそれ以外の奴には脅威性が全くないんだよ」

「……」

「なあ、ちょっと言こす?ぎじやないか」

意氣消沈している大地を見ていた俺に声がかかる。なんだ十代か。

「何だ。つて、俺つてそんなに有名か。さつきから知らない奴に名前呼ばれてるんだけど」

「…声に出てたか。お前は結構有名だよ。クロノス教諭にデュエルで勝つてたからな。それと別に言つて過ぎつてほど話したつもりはない。全部事実だしな」

「……俺は、間違つていたのか……」

大地が声を絞り出すよつに言つた。

「そ、そんなこと無いぜ。デッキは自分の好きなように作るものだからな。間違つてるのはこの帽子眼鏡だぜ」

（帽子眼鏡つて……）「デッキを作るのに関してはそれに同意するが、全く見たこともないデッキだつたらどうするつもりだ。」こう言い訳するのか「あんなデッキは今まで一度も見たことがない。」から研究して次こそは勝つ！」アホか、お前はジャンケンでもしてんのか。今まで見たことがないデッキを前にして。「え、あのデッキはグー？ チヨキ？ パー？」とか、悩んでるうちに負けて「よし、あのデッキはグーだ。早速パーのデッキを作つて再挑戦だ！」つて。なんなんで一番になんかなれるかよ、デュエルはジャンケンじゃないんだ。デュエルモンスターZに最強のカードなんてないし、最強のデッキもない、もしお前がデュエルキングになつたとしても前情報がないチャレンジャーニにやられるのが落ちだ。ただ、十代が言う通り、デッキを作るのは個人の自由だ。コレからどうするかはお前次第だよ」

「おれは、俺は……」

「ちつ、めんぢくせえ。おい十代、ちょっと口イツ見てる」

大地から視線を外して部屋に向かう。デッキは携帯していくてもデュエルディスクは持つてないからな。

「へつ、俺が。つて、おい。何処行くんだよ、ちょっと、お~い……」

~~~~~

「おい、どこ行ってたんだよ。『イツは何も言わないし』

「ほら付ける」

デュエルディスクを十代に向かつて放る。驚きながらも俺の腕に付けたディスクを見てにやりと笑った。

「へへっ、ずっと翔とばかりやつて飽きてきたんだ」

「アニキひびいっす！！」

「久々にメインデッキを使う。大地、よく見とけよ」

「『<sup>デュエル</sup>決闘』」

「俺のデッキは先攻有利だが、ハンデだ先攻は譲ろつ」

「後悔するなよ……俺のターン。ドロー！……俺はフェザーマンを攻撃表示で召還。さらにカードを一枚セットしてターンエンドだ」

「俺のターン、ドロー。豊穣の女神 アルテミスを召還、カードを五枚セットしてターンエンドだ」

「五枚！ 手札事故でも起こしたのか？ それにアルテミスの攻撃力はフェザーマンを上回っているのに攻撃しないのか？」

（攻撃力1000のフェザーマンを攻撃表示で出してる時点で罷だ

と語つてゐるよつたもんなんだがな）

「違つつすよアーチー！ アレは第四代田キングデュエリストも使つたカードで、カウンター罠カードを使つだびにカードを一枚ドローする効果を持つてゐます。まさかあの眼鏡にデュエルディスク……、間違ひないつすよ。何でデュエルキングの山田和希がこんな所にいるつすか！？」

「ちつ、コレじゃあんまし帽子被つてゐ意味ねーな。コンタクトは好きじゃねーんだよな……」

「すげーゼ、こんな所でデュエルキングと戦えるなんて。俺のターン、ドローー！」

「させらか、『強烈なはたき落とし』相手が手札に加えたカードをそのまま墓地に送る」

「何ー！ おつ。へへつ、良いカードが落ちたぜ」

「アルテミスの効果で俺はカードを一枚ドローする」

「俺は、墓地のE・HERO ネクロダークマンの効果を発動。手札から、レベル五以上のE・HEROを一度だけ生け贋なしで召還できる。来い！ E・HERO ハッジマン」

「残念、キックバツク発動。モンスターの召還、反転召還を無効にして手札に戻す。ハッジマンには戻つてもらつ。そして、カウンタ一罠を発動したことによつてアルテミスの効果で一枚ドローー」

「そんなん、俺はもう召還出来ないぜ、ターンエンド……」

「俺のターン。ドロー、手札からもう一体のアルテミスを召還。バトル！ アルテミスでフュザーマンを攻撃」

「今だ、トラップ発動。異次元トンネル＝ラーゲート。俺のモンスターとお前のモンスターとを入れ替えて戦闘を続ける。フュザーマンとアルテミスを入れ替えるぜ」

「それも通さん。カウンター罷、魔宮の賄賂。相手の魔法、罷を無効にし相手はカード一枚ドローする。さらば、一体のアルテミスの効果で一枚ドロー。… さあ、カードを引け」

ライフ 4000 3400

「フュザーマンが…。ドロー…（よし融合だ）」

「お嘗びの所悪いが、また強烈なはたき落とし。手札に加えたカードを墓地に送る。そして俺は一枚ドロー」

「融合まで～」

「もう一体のアルテミスで攻撃」

ライフ 3400 1800

「カードを一枚セットしてターンエンド」

（今の手札はバーストレーディにスパークマン、エッジマン融合が来れば巻き返せる！）「俺のターン。ドロー！－ つ！ よし、コイツにかける。来いE・HERO バブルマン。バブルマンの効果発動！」

「悪いがそれも通さない。カウンター罠発動、天罰。モンスター効果の発動を無効にして破壊する、アルテミスの効果で一枚ドロー！」

「折角だ、コイツを出さなくとも勝てるだろ？が……。手札のモンスター効果を発動！ カウンター罠を発動した時、自分フィールド上のモンスターをすべて破壊してこのモンスターを特殊召還する。来い、裁きを下す者・ボルテニス」

「！」、攻撃力2800……

「ボルテニスの効果、自信を特殊召還する時に破壊したモンスターの数だけ相手フィールドのカードを破壊する。そのセットカードを破壊。天の雷」

（俺の手札に使えるカードは無い……）「ターンエンドだ

「俺のターン、ドロー。バトル！ ボルテニスでダイレクトアタック

「うわあああああ！」  
「アニキっ！」

十代がボルテニスの雷を受けてリアクションを取っている。まあそれはどうでも良いとして大地に目を向ける。

「……俺は、お前にいつか強くなつて俺を越えるつて言われた時うれしかつたよ。けど、コイツみたいにデッキに愛着とか拘りとか無く、相手に合わせてデッキを換えて、自分のデュエルって奴を見つけて無い奴に言われても何もうれしくない。もしお前が対俺デッキなんて使つてきたら真っ正面から叩き潰してやる」

言いたいことは言えたので大地に背を向けて歩き出す。コイツとはここまでか、とも思つていたので背中に大地の声がかかつた時は思わず口元がほこりんだ。

「やつと解つた。俺は俺のデュエルをしていたつもりだつた。だが和希と十代のデュエルを見て解つた。お互が正面からぶつかり合うことで互いを高め合うことが出来る……、俺は相手に合わせて自分のデュエルを出来ていなかつた。……これから俺は自分のデュエルを探す。そしてその道を極めた時お前に挑もう。もう俺は今までの俺じやない、これからは自分のデュエルを極めてやる。だから待つてろ！ 山田和希。いつか俺は自分のデッキでお前を越える！！」

ちらりと振り向いた時に見えたあいつの目は今までにないぐらいの決意が込められていた。今回も振り向かずにドアに向かいながら答える。

「ああ、待つてるぜ」

「和希……」

十代の声、ちらりと顔を向けると十代はお得意のポーズを取つて

いた。

「ガツチャ！ 楽しいデュエルだつたぜ」

「アホか、俺は三ターンで終わつて全くつまらなかつたよ。せめて十ターン続けるかチエーンを四つ以上積んでから言え！」

チエーンつて何だつてとか言つてる十代に大地と翔が教えるのを背にドアを閉める。やつと楽しくなつてきた、待つてろデュエルアカデミア。

## 第一話 俺と十代と三沢大地（後書き）

馬鹿とかアホとか言い過ぎですよね～

カード名を“”で囲むのは微妙。

ちなみに十代のもう一枚のふせはエレメンタルチャージです。

## 第三話 十代と万丈田とアンティデュエル（前書き）

主人公がラーアイエローって言つて、説明をしてなかつた……、まあ解るかな？

……ちなみに主人公の名字が山田って言つるのは新規小説執筆の時ルビの振り方の例で出てきた山田太郎さんから。

主人公チートドローの回です。つかデュエルするつもり無かつたのになぜかやつてる無かつたらもつとみじかかつたのに……。

## 第三話 十代と万丈田とアンティデュエル

その後フェリーは無事、何も起きてないとなくアカデミアに着き、入学式も終わり。寮で夕食を食べて部屋で休んでいると新入生に配られたP.E.D.に通信が入った。

（万丈田からか……だいたい予想は付くな。けど十代はどうなんだろ）

俺はそれを例の鞄に突っ込んでから通話ボタンを押した。

『「やあ、山田和希く、ん…………」ドサッ 「ま、万丈田さん。どうしたん……わああああああつっつ」』

「あんなに大声を上げるなんて可哀想に、誰が一体何をしたのやら組もうかな……。

天井しか映っていない画面を見て通信を切る。さて、デッキでも

~~~~~

カードから田を離して時計を見るともう明日になろうとしていた。そろそろ止めようかと椅子から立ち上がり背筋を伸ばすとパキパキと音が鳴る。そのとき外に方に人に気配を感じた、窓に近寄つて外を見ると走り去る後ろ姿が見えた。

「オシリスレッド、あれは十代か、もしかして俺を誘えなかつた腹  
いせか？ それとも一人とも誘つつもりだつたのか？ ……万丈目  
の様子を見てくるのも楽しそうだな」

ささつと準備をしてデュエル場へ向かう。そういうればフレイムウ  
イングマンが左手を使つ回だつて、デュエルディスクは謎の技術満  
載だな。

「あら山田くんじやない。びづしたのこんな所で」

「十代がデュエル場に向かうのが見えたからな。それと俺を呼ぶ時  
は和希でいい、山田は個性がなさ過ぎるだろ」

「……それもそうね。じゃあ和希つて呼ばせて貰うわ」

そんなやり取りをしていくうちにデュエルは進む、それにしても  
万丈目はどうしてあんな使いにくいカード使つてるんだ？ 地獄つ  
ながりだからってあればないだろ……俺のネタデッキも人のことは  
言えないけどよ。

「まずいガードマンが来るわ！ それにアンティデュエルは校則で  
禁止されてるから捕まつたら退学かもよ！」

「なんだつて！ そんな校則聞いてないぜ～」

「つー もういい、結城十代。お前の実力は解つた、試験はまぐれ

だつたようだな」

そう言つて万丈目と取り巻き達はデュエル場を出ていった、十代は納得行かない様子だつたが翔や明日香に強引に連れ出される。俺としては万丈目が俺がいることに気づいた時に一瞬怯えた様子を見ることが出来て満足だな。

「あのまま続けていたら、アンティルールで大事なカードを取られていたんじゃないの？」

学校前まで逃げると明日香が十代に話しかけた。しかし十代はへつと笑つて答える。

「いや、あの決闘は俺の勝ちだぜ！」

そういうて手に持つていた死者蘇生のカードを見せる、原作通りだな。

「アホか、あのデュエルはお前の負けだ」

「誰だ！ つて、何だ和希か。それより俺の負けってどういう事だよ、死者蘇生でフレイムウイングマンを復活させていれば俺が勝つていたはずだろ」

「自分の使つているカードの効果ぐらい覚える。E・HEROの融合モンスターは融合召還以外での召還は出来ないって書いてあるだ

る。例外はあるが

「…………本当に、じゃあ、あの『テコノル』は俺の負けなのか……」

「さあな、クレイマンでも蘇生させて次のターンを耐える事が出来てたらどうなったか解らないだろうな。どうにしてもあのターンで決着が付く」とはない

「くつやう……」

「そんなに落ち込む」と無いつすよアーチキ。アーチキなら絶対逆転出来たつす

「お前は黙つてろ。それで十代、お前は強くなりたいか。お前がそれを望むなら俺はお前の『テック』作りに協力するしカードも渡そう」

「……少し考えさせてくれ

「やうか、じゃあな」

（あまり良い答えは聞けなかつたか。まあ十代にもプライドがあるんだひうな）

イエロー寮に戻ると部屋の前に大地が立つていた。

「どうしたんだ？ 何か話があるなら『P.E.D』に連絡を入れればいいだろつ」

「新、俺の『テック』一号が完成したから試しにやってみよつと思つてな。それに、俺はお前の番号をまだ聞いてないぞ」

「もうこんな時間だし明日に回そうとか考へないのか。それにこもつ寝てたかも知れないだろ」

「思わないな。それにお前が部屋を出た時の音も聞こえてたからな

(即答かよ)

「ハア……解った。やろう」

「ああー」

（）（）（）（）（）（）（）（）（）（）（）（）（）（）（）（）

寮を出てデュエルディスクを構える。夜中だといつにこ薄暗く、大地の顔がはつきり見えた。

「「<sup>デュエル</sup>決闘」」

「大地！このデッキは小学生でも解る簡単なデッキだ。出して、並べて、殴る。だがそれのある意味完成形、子供が使ってもプロデュエリストに勝てるレベルの物だ。しかし、このデッキにもまだまだ上がある、コレに勝てたらお前も上級者に認めてやるつ。俺のターン！ ドロー

手札からレッドガジーツを召還、効果によりイエローガジーツを手札に加える。さらにカードを三枚伏せてターンエンドだ」

「除去ガジェデッキか！！ だがデッキの相性はいい。ドロー、手

（ちつ、ミラフオに幽閉、奈落が破壊されたか。大地もドローア力結構あるんだな）

「危なかつたな……俺はハイドロゲドンを召還する。ハイドロゲドンで攻撃！ ハイドロブレス レッドガジェットを破壊。さらにモンスター効果によりデッキからもう一体ハイドロゲドンを特殊召還する。二体目のハイドロゲドンでダイレクトアタック！ カードを一枚伏せて、ターン終了だ」

和希 L P 4000 2100

（ちょっとまずいな。あんなに大きな事言つたのにこのまま負けるとかカツコ悪すぎる。）

「……俺の、ターン！ サイクロンを発動！ 場の魔法トラップを一枚破壊する。俺から見て右側のセットカードを破壊だ。」

「くつ、収縮が……」

「戦闘補助か…マシンナーズギアフレームを召還！」

「マシンナーズ！？ しかし俺の知らないカードだ。和希はそんなカードをどこから手に入れてくるんだ？」

（未来からだよ。なんて言えないよな）

「ギアフレームの効果、召還時デッキからマシンナーズと名の付くモンスターを手札に加える。マシンナーズフォートレスを手札に。さらに、マシンナーズフォートレスの効果発動。手札から機械族モンスターをレベルの合計が8以上になるように捨て手札、墓地から

特殊召還する。俺はマシンナーズフォートレス自身とイエローガジエットを捨て、墓地からフォートレスを蘇生させる。来いマシンナーズフォートレス

「攻撃力2500が簡単に……」

「一体のモンスターで攻撃！ ハイドロゲドンを蹴散らせ」「戦闘では破壊されず戦闘ダメージも受けない」

「ちつ、良く防ぐじゃないか。ギアフレームの効果発動、一ターンに一度、このモンスターは機械族モンスターに装備カードとして装備できる。フォートレスに装備、ターンエンドだ」

「ユニオンモンスターか。俺のターン！ 手札からオキシゲドンを召還。さらに魔法カード、ポンティング・H2Oを発動！ フィールド上のハイドロゲドン一体とオキシゲドン一体を墓地に送りデッキ、手札、墓地からウォーター・ドラゴンを特殊召還する。デッキからウォーター・ドラゴンを特殊召還」

「出てきたか。大地も案外侮れないなあ……」

「バトル！ ウォーター・ドラゴンでマシンナーズフォートレスを攻撃、アクア・パニックシャー。」

「ギアフレームの効果、装備モンスターが破壊される場合、代わりにこのモンスターを破壊する」

「どうだ！ コレが俺のデッキだ！」

「ああ認めるよ、これは認めざるをえない。だけどな、まだデュエルは終わってないぞ。俺の……ターン。ドロー！ ここで引くとかどういう事だよ！ 強欲な壺、発動！ カードを一枚、ドロー！ 天使の施し、発動！ カードを三枚ドローし一枚捨てる。貪欲な壺、発動！ 墓地のモンスターを五体デッキに戻し一枚ドロー！」

「あの状況から手札が三枚だつて！」

「反撃開始だ。手札のD・D・クロウの効果発動。墓地のモンスターを一体除外する。俺はオキシゲドンを選択。さらに魔法カード地割れを発動、ウォーター・ドラゴンを破壊！ ウォーター・ドラゴンのモンスター効果は墓地にモンスターがそろっていない場合は発動しない。これでフィールドはがら空き、フォートレスでダイレクトアタック。ダメージステップ時、速攻魔法リミッター解除、発動！ 自分フィールド上の機械族モンスターの攻撃力を倍にする。行けエー！」

「うわあああああ

三沢 L P 4 0 0 0 0

フォートレスの攻撃が決まり後ろに吹つ飛びリアクションを取つている大地に近づいて声をかける。

「すゞかつたぞ」

「そ、そつか

「ああ、ノーダメージで勝つてやるつもりだったのに。こいつがやられるところだった」

「ノーダメージって……」

「で、お前はそのデッキを貫くのか？」

「いや、確かに使いやすいデッキだがまだ決めるには早い。これからも俺の道を究めるために研究し続けるや」

「そうか、……お前さえよければ俺達がデッキを組む時にお互いにアドバイスを出し合わないか」

「良いのか、それは確かにありがたいが俺がお前に意見できるかどうか……」

「いや、第三者の意見って言つのは結構大事なものだ。まあ、最終的に決めるのは自分だけだな」

「そりゃ、じゃあよろしく頼む。早速だがこのデッキに相性のいいモンスターは居ないか？ どうしてもシナジーのあるモンスターが見つからないんだ」

「今からかよ…… もう夜中だぜ」

「デュエルモンスターZをするのに時間など関係ない！ まあ、存分に研究しよう！」

「明日から授業だろ、勘弁しろよ～」



## 第三話 十代と万丈目とアンティデュエル（後書き）

何か納得いかない。そのうち修正入れるかも。つか主人公の性格がうぜえ……、殺すか、上条当麻的な意味で。性格まで変わるか解らんけど。

感想からハイドロゲドンを地砕きで除去していくことを忘れていることを指摘されました。後付で申し訳ないですが、セットカードを増やしサイクロンで破壊する。と言う手段に変えさせて貰いました。

今後こんな間違いがないように気を付けます。

## 第四話 少女と俺と果たし状（前書き）

オリヒロイン投入。こまめに改行した方がいいのか解らん。

## 第四話 少女と俺と果たし状

結局、部屋に戻った俺はデッキを改造する羽目になつた。と言つても俺のデッキは改造するところがあまり無く、大地の知らないカードが多数あつたため、後回しにして大地のウォーター・ドラゴンを切り札に据えたデッキを改造してみるとこりだ。

「ちょっと待て！ 恐竜族のサポートはいらないって言つただろう。オキシゲドンの攻撃力はそこそこあるんだしハイドロゲドンは水属性なんだからウォーター・ドラゴンのサポートと共有できる、それなら水属性で使い勝手の良いモンスターを入れた方が事故し難いだろ。だいたい大進化薬に究極恐竜アルティメットティラノなんて入れると、もうウォーター・ドラゴンいらぬじゃねえか！」

「しかしやはりウォーター・ドラゴンは召還に条件があるじゃないか。ハイドロゲドンとオキシゲドンのサポートがあつてもH2Oが来ないと出せないと厳しすぎる」

「さつき使つてたお前が言つ事じゃねえな……。だいたいな、今作つてるのはファン、楽しむためのデッキだ。恐竜族デッキなら別に作つてあるし、ウォーター・ドラゴンを入れてるだけならこんなデッキ作つても面白くねえよ。もちろんそこそこ強くなるようにするけどな」

「そつか、楽しむためのデッキ……。確かに、強いデッキを作るのに田を向けすぎていたかも知れないな」

「やつと納得したか……。水属性でなかなかの奴はペンギン・ナイト

「H2Oは封印の黄金櫃を使うか  
までの時間稼ぎにはなるだろ。H2Oは封印の黄金櫃を使うか  
ないな。サルベージはオキシゲドン達には使えないけど場がそろ  
るフェンリル、アビスソルジャー やアクエリアとかも良いかもしね  
メアやハイドロゲドンと同じモンスターを破壊した時に効果を使え

「俺はさつきから聞いてるだけなんだが……。それに十分強い『テツキなんじゃないか?』

「なんだよ、じゃあ相性が良いカードとかあるか?」

「 そ う だ な ． ． ． 破 壊 輪 と か 破 壊 し て 使 う よ う な カ ー ド な ん か が い い と 思 う が 」

「破壊輪……そう言えば」うちではまだ制限カードか」

「どうかしたのか？」

「いや、やつだな。やつらの画面はこな。じゃあ、これなんてど  
うだ?」

いや、こっちの方が使いやすいだろ？

の町、歸る」とは出来なかつた。

~~~~~

少女は一人薄闇の中で立ち尽くす。

「うう、折角早起きして一番に教室に来たのに座る席が自由だなんて……。これじゃあ机の中に手紙を入れて、物を取り出す時に気づいて貰おう作戦！ が使えません。

でも、わたしはこの程度のことではへこたれたりしません！ お姉ちゃんも言つてました、恋と決闘は度胸デュエルだつて。

しかし、直接渡すのはやつぱり恥ずかしいです、どうしたらいいんでしょ？……。はつ！ こうじている内にも誰かが近づいてくる足音がします。はわわっはわわわわっ

ガラガラッ

「あら？ 私が一番じゃなかつたのね。結構早く来たつもりだったけど……明かりも付けないでどうしたの？」

「ええと、田が早く覚めまして。あ、明かりのスイッチそこにあつたんですね。暗くて気づきませんでした。あはは」

慌てて封筒を背中に隠します、入ってきたのは天上院さん。珍しい名字だったから合つてるはずです。……たぶん。

「？ うつ。まあ良いけど」

うう言つと天上院さんは机に座つて教科書に田を通し始めました。あ、わたしもうしょ？……はれ？ 手紙を持ってくることに

氣を取られて教科書、と言つたか鞄を部屋に置き忘れてきました……。うつ、仕方ないです。いつたん寮に戻つて取つてきましょう。

~~~~~

鞄を取つて戻つてくる頃には他の生徒達もやつて来て、いよいよ授業が始まつてしましました。けど、やつぱりあの人のこと気が気になつて授業になんか集中できません。

あの人気が座つてゐる席を見てみると……つて、寝てます！ 初日の授業から寝るなんてどんな神經をしてるんでしょうか。隣に座つている同じラーライエローの眞面目そうな人が起こそうとしてますが、全く動く氣配がありません。

先生は注意しないんでしょうか。そう思つて前に居るへんてこりんな先生を見てみると、あ、オシリスレッドの生徒を睨んでますね。そつちも隣のちつさいこが起こそうと肩を揺すつてますが、全く起きる氣配がありません、それどころかいびきまで欠いてますよ。

はあ、こんな学校生活で大丈夫でしょうか……。

午前の最後の授業が終わりました。みなさん新しいパックやパンが売つていると聞いて購買の方に行つてしましました。あのオシリスレッドの人はチャイムが鳴ると、すぐに起きて隣の人と一緒に教室を出ていきました。あの人はチャイムが鳴つても眠り続けていた

ので、隣の人も起こすのを諦めて教室を出でていきました。

あれ？ もしかして一人きりですか？

これは手紙を渡すチャンスです！ そつと近づいて教科書に間に手紙を挟むだけ。大丈夫、やれます！ そーっと、そーっと……

「ふあ～～あ。よく寝たー……ん？」

な、なんで今起きるんですか！ か、かくなる上は…

「！」これ。受け取つてください！」

「あ、ああ……」

手紙を渡してダッシュで逃げます。つづ、お姉ちゃん。わたし、負けてしまいそうです。

~~~~~

「これは、果たし状、か

さつきの女の子に渡された手紙を見て、ポツリと言つ。初日からこんな物を貰うなんて、さすがはデュエルアカデミアだと思つ。さつきの子はどうかで見た覚えがある気がするんだが……どうだつた

かな。

「和希」

「ん、大地か。どこ行ってたんだ?」

「購買だ、もう昼休みだぞ。ん? それはラブレターか?」

「違う果たし状だよ。ニヤニヤすんな、気持ち悪い」

「気持ち悪いは無いだろ? それに果たし状つて…そんな花柄の奴があるか」

「あるんだよ、それが。結構前に山ほど貰った、畜生。いつちは期待して……いいや、飯食おうぜ、何買ってきたんだ?」

「あ、それは俺のだ。自分で買って来いよ」

「うひせえ、誰のせいで寝過したと思ってるんだ。迷惑料払え」

「な、俺のドローパンが」

「げふ……納豆とかマジ勘弁……」

「和希——」

もうドローパン買わね。までよ、大地が買ったから納豆なのか、そうなのか。……でも、納豆の可能性があるだけで買つ氣が起きないな。



## 第四話 少女と俺と果たし状（後書き）

ああ～デュエルの所まで行きたかった。でもその体力はねえ……  
気長にやりますか。

今回、小説を書かせて貰っているのですが、作者は現在中学三年生。

これまで時間を見つけてちまちま書いてきたのですが、さすがに受験に専念しないといけないので、しばらくパソコンの使用を自粛することにします。

取りあえず三月の公立入試まではパソコンが使えないでの、それまで更新することは出来ません。暇を見つけてノートにネタをメモしておくつもりですので四月になれば上がるかも……。

簡単に言つてしまつと三月までは更新はお預けです。……ついこのお知らせの文章を考えるの苦手だなあ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6735o/>

遊戯王GX どうしてこうなった.....

2011年4月6日12時38分発行